【資料紹介】

中山優写真資料について

愛知大学非常勤講師　石田　卓生

はじめに
1. 少年時代
2. 東亜同文書院時代
3. 調査旅行
4. 朝日新聞時代
5. 外務省嘱託、建国大学教授時代
6. 南京時代
7. 戦後
8. その他

はじめに

本稿は愛知大学が所蔵する中山優旧蔵と思われる写真資料の一部を紹介するものである。

この資料は4冊のアルバムからなるもので、家族写真などきわめて個人的な写真も多数含んでいるが、ここでは東亜同文書院に関連するものや彼と中国との関わりを示す写真をとりあげる。

中山優（1895～1973）は、熊本県来民町笹本（現熊本県山鹿市鹿本町来民笹本）に生まれ、1913年（大正2）熊本県立鹿本中学を卒業、1915年（大正4）秋東亜同文書院政治科に入学するが1919年（大正8）夏に退学、同年大阪朝日新聞入社し北京特派員となるも結核を患い退社、1923年（大正12)から郷里で3年間療養した後に上京、池袋を経て1928年（昭和3）からは狛江に移り東亜同文会機関誌『支那』などに中国時事評論を寄稿、1930年（昭和5）外務省嘱託、1937年（昭和12）頃から東亜同文会会長であった近衛文麿の知遇をえるとそのブレーンの一人と目されるようになり1938年(昭和13)の第三次近衛声明を起草、同年満洲国建国大学教授となるが1943年（昭和18）に辞職、1945年（昭和20）満洲国駐華特命全権公使として南京に駐在するが間もなく敗戦、1946年（昭和21）帰国。戦後は、1956年（昭和31）亜細亜大学教授となり1971年（昭和46）退職した。

写真1　中山優　様子や背景に和式家屋がみえることから戦後の狛江自宅での撮影か

彼のジャーナリスト、フリーライター、教員、外交官といった多岐にわたる経歴はユニークではある。しかし、特筆するような業績があるわけでもなく、一般に名を知られているとはいいがたい。実につかみどころのない人物である。東亜同文書院卒業生の同窓会組織滬友会が編んだ『東亜同文書院大学史』は彼を「天衣無縫の教育人」[1] とよんでいるが、これなどは経歴をみて教員であった期間が長いことから「教育人」としたのであろうが、曖昧であり確固たるイメージを与えうるものではない。しかし、前掲『東亜同文書院大学史』では、経済界、官界、政界、学界、報道界等で特に目立って活躍成功した20人の「異色の人々」の一人として彼がとりあげられているのである。同窓たちにとって、彼は東亜同文書院を代表する人物だったようだ。

自身の母校では代表的人物とみなされているにもかかわらず、評価、位置づけが明確ではないというのは、彼についての研究がいまだ不十分であるということであろう。

中山についての資料は数冊の評論集[2]と『中山優選集』[3]、同窓や関係者の断片的な回想だけであり、詳細に考察しようとしたものは、卑見の限りでは栗田尚弥『上海東亜同文書院』[4] だけである[5]。

本稿は写真資料の紹介でしかなく、中山について考察をすすめうるものではないが、中国を専門とする東亜同文書院に学び、その後も中国問題にとりくみつづけた足跡を写真により追うことによって今後の研究に資することとする。

とりあげる写真資料は時系列に整理されておらず、またキャプションがついたものはほとんどない。そのため正確な撮影時期、場所を確定することが難しいものが多いが、写真の内容などから、少年時代から戦後へと時期ごとにわけて紹介していく。

1. 少年時代

中山優の生地である熊本の来民は第23代内閣総理大臣であり東亜同文書院の経営母体である東亜同文会の副会長も務めた清浦奎吾（1850 ～ 1942）の出身地である。清浦のことを郷土の偉人として中山は知っていたかもしれないが、二人に直接のかかわりはなかったようである。中山が物心つく頃、清浦はすでに授爵されて高位にあった。しかし、清浦は1907年（明治40）から1914年(大正3)まで東亜同文会副会長で、中山が東亜同文書院に入学したのはその翌年であり重なっていないものの同郷の成功者の存在は中国を志すことに何らかの影響をあたえたのかもしれのかもしれない。

前述したように中山は鹿本中学校を出ていると伝えられている。この近くには来民小学校があり、彼が初等教育を受けたのはこの学校なのかもしれない。次の写真の彼とおぼしき少年はまだ幼く、小学校の頃のものであろう。

写真 2　前列左から 2 人目が中山か

（写真 2 の部分拡大）

中山は自らを水呑百姓出と称しているものの[6]、少年時代からの写真が多数あり、まわりの少年たちと比較して身なりもきれいなことから、豊かな家の出であろう。

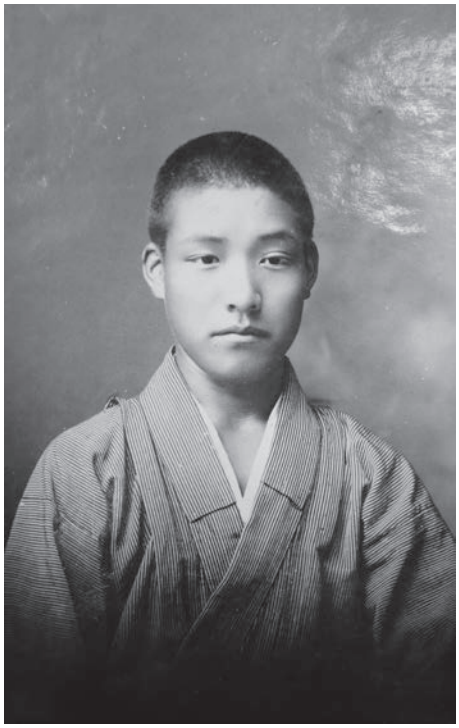

写真 3　中学生頃か

次の写真 4 は、写真 2 と比べて上級の学生のようであり中学校のものと推測する。

写真 4（前から 2 列目、左から 4 人目）

（写真 4 の部分拡大）

写真 5　中学生頃か

写真 6　前列左が中山　中学生頃か

写真 7　前列右が中山　中学生頃か

2. 東亜同文書院時代

1915年（大正4）に中山優は東亜同文書院政治科に15期生として入学した。同期には、後に母校の中国語教員となり戦後は愛知大学で『中日大辞典』を編んだ鈴木択郎（商務科）や同じく愛知大学の辞書編纂に参加した宗内鴻（政治科）がいる。しかし、東亜同文書院のいわば正史ともいうべき前掲『東亜同文書院大学史』は、彼を16期生としている。これは落第したためである。さらに卒業できなかったために正確には16期生でもない。留年のために15期生として卒業できず、次の16期生とともに調査旅行に参加したものの、結局は卒業するための授業出席回数が足りず、さらなる留年をよしとせず退学している。

写真8　東亜同文書院内か　右から2人目が中山

しかし、当時の東亜同文書院の院長であり、関係者間でこの学校のシンボル的存在であった根津一（1860～1927）が「中山は卒業には縁がない男だ、無理をしてはいけない」[7]と言った、卒業証書ならぬ「修業証書」[8]や「卒業以上の実力はあるという過分の推奨をこめた当時の大阪朝日の上野理一社長宛ての長文の紹介状」[9]が中山に与えられたということによって卒業生扱いがなされているのである。実際にそうした出来事はあったのであろうが、これは中山自身が述べていることにもとづいているのであり、いわば伝説の類いである。

写真9　前列中央が中山

写真10　中列左端が中山。前列右端は教員の山田謙吉（岳陽）、同左端も教員の真島次郎

写真 11　中央着座の左端の和装が中山

写真 12　後列左から 2 人目が中山

写真 13　中国服姿が中山

写真 14　中央が中山

写真 15　洋装が中山

写真 16　中央が中山　後ろは杉原四郎

写真 18　3 列目右から 5 人目が中山

写真 19　後列左から 7 人目が中山

写真 17 後列右端が中山　前列中央が杉原四郎

写真 20　2 列目左端が中山

写真 21　後列左から 2 人目が中山

写真 22　前列左から 2 人目まわし姿が中山

写真 23　中央が中山

写真 24　右端が中山

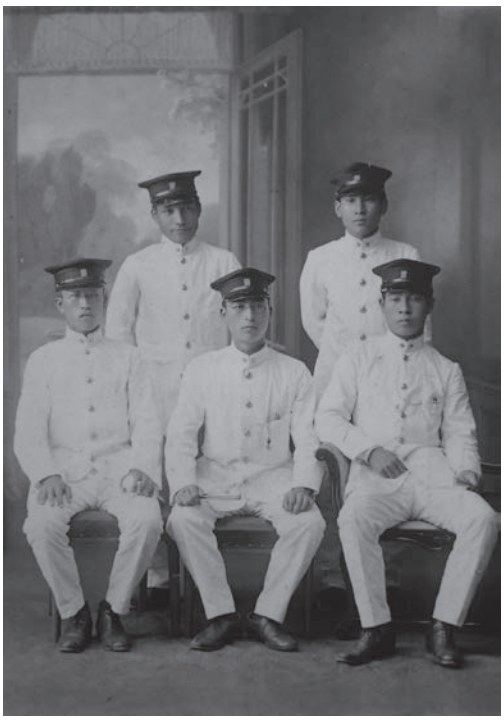

写真 25　後列左が中山

写真 26　前列右端が中山

写真 28　立ち姿右から 3 人目が中山

写真 29 「杉原四郎書院同期　大正七年死」というキャプションがついている

写真 27　前列右が中山

写真 16、17、29 の杉原四郎は中山と同じ 15 期入学、後掲する中山が書いたと思われる文章では、海南島開拓を志す杉原との関係について「今予〔中山―引用者〕は彼あるに依りて生き彼〔杉原〕は予あるに依って『海南島』なる標語に、彼の命を新たにした」[10] と親しみを込めて記している。なお、杉原は 1918 年（大正 7）日本へ向かう船上で消息を絶っている [11]。

3. 調査旅行

中山優は1918年（大正7）7月5日から8月15日にかけて16期生の調査旅行に宮本栄太郎、宮川順太、菊池伴治、竹内虎治、鈴木正堅からなる政治科班の一人として参加している。上海から海路香港へ向かい、広東、韶州、楽州、宜章、郴州、公平坪、来陽、衡州、衡山、湘潭、長沙、岳州、漢口を経て北京を目指すという中国を縦断するものであった。旅程は現在の京広線に相当するが、鉄道は北京から漢口までしか通じておらず、彼らは広東から漢口までを徒歩と船によって北上した。当時の中国は北京政府と広東政府に分かれた内戦状態にあり、広東省から湖南省へのルートはその最前線にあった。驚くべきことに、彼らはその最中を通過していったのである[12]。彼は後に「大正七年頃、内戦の地雷地帯をぬけて広東から湖南の衡陽にでると、そこには直隷派の特別旅団長としての呉佩孚がいた。面会を申しこんだが謝絶されて、渺漫たる煙波を眺めながら湘江の舟上に天長節を祝して杯をあげた。その頃広東から北京にいたるまで、各地の県城では、知事か誰かの日本留学生出身者がいて、全般として排日の空気でありながら、われわれは愉快に内地の旅行ができたものである」[13]と述べている。

卒業文集にあたる『虎風龍雲』には「広東から北京へ」と題する政治科班の旅行誌が寄せられているが、16期生の文集であるにもかかわらず15期生の杉原四郎と親しくする様子が描かれており、杉原と同じ15期入学の中山が中心となって文章が書かれたと思われる[14]。

この際のものとみられる写真を次に紹介する。

写真30　広東から湖南へ向かう中山たち一行[15]

写真31　シャツを羽織っただけの中山

写真32　褌姿の中山

写真 33　左から 2 人目が中山

写真 36　前列右端が中山

写真 34　前列左から 2 人目が中山

写真 37　武昌黄鶴楼 (16)

写真 35

写真 38

写真 39　許昌付近か

前掲『虎風龍雲』には 1918 年（大正 7）8 月「十二日　前八時発、大石橋に到って下車、洪水氾濫の跡を線路に添ふて許州迄三十里。旅客荷を肩にして魚貫してゆく」[17] とあり、写真 39 はその際の写真であろう。

4. 朝日新聞時代

1919 年（大正 8）に東亜同文書院を退学した中山優は、先輩にあたる大阪朝日新聞の神尾茂（6 期生）を頼り同社に入社したという。彼自身の言によれば前述した根津一による大阪朝日新聞社長上野理一への紹介状を携えていた [18]。

新聞記者として先輩にあたる大西斎（8 期）がいた同社北京支局に勤務したが結核のために辞職し 1923 年（大正 12）に郷里に戻っている [19]。

写真 40　東亜同文書院の制服でないことから朝日新聞社員時代頃に撮影されたものか

写真 41　右のベスト姿が中山

写真 42　右の中国服姿が中山

写真 43　左端が中山

左は上記写真の裏側に押されたスタンプである。「山東写真通信社　支那青島　祝町六番」とみえる。「祝町」とは現在の旅順路にあたり、1914 年（大正3）から1922 年（大正11）までの日本占領時代の地名であることから、この写真は中山が北京支局にいた1919年（大正 8）から1922年（大正11）の間に山東省で撮影したものだと考えられる。

写真 44　右から 2 人目が中山　右から 3 人目の人物と写真 43 中央の人物が同一人物のようであり撮影は同じ時期か

写真 45　後列左が中山　様子から朝日新聞時代か

写真 46　右が中山　様子から朝日新聞時代か

写真 47　右が中山　若い様子から朝日新聞時代か

写真 48　現在の北海公園と思われる。

写真 49　現・故宮博物院を北西から望む
現・北海公園から撮影しものか

写真 50　現・北海公園から東の現景山公園
を撮影したものか

写真 51　天壇　奥に祈年殿が見えることから、
丹陛橋側の南より撮影したものか

写真 52　天壇の祈年殿

上記北京での写真 48 ～ 52 は東亜同文書院時代の調査旅行時に撮影された可能性もある。

5. 外務省嘱託、建国大学教授時代

写真 53　鄭孝胥の書の前で　前列右から 3 人目が中山　背景の書に「戊辰」「孝胥」とあり 1928 年（昭和 3）以降の撮影であると思われる

写真 54 「昭和六年十二月初旬」というキャプションがついている

写真 55「昭和十七六年　南京　玄武湖　川又さんと」というキャプションがついている　川又務か

写真 56 「昭和十八年五月中旬上諏訪」というキャプションがついている　着座の右が中山、同左が石原莞爾

写真 57　右が中山、左が石原莞爾　ともに「東亜連盟」の腕章をつけている

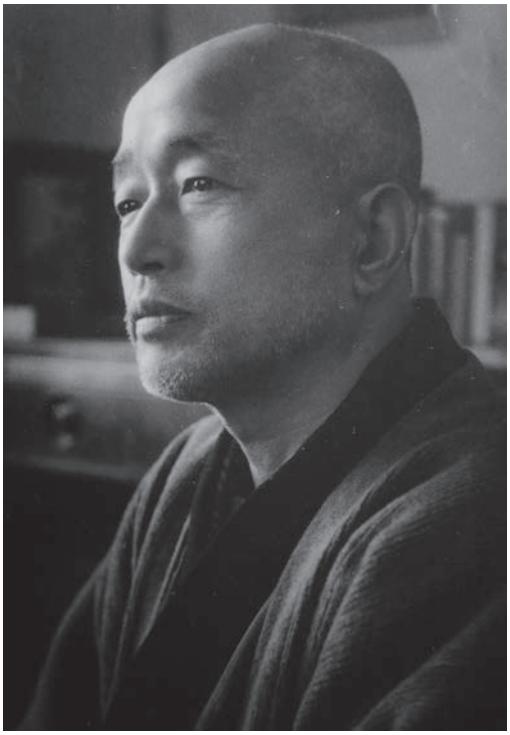

写真 58　石原莞爾

中山が石原莞爾（1889 ～ 1949）の推薦によって建国大学教授となっているなど、二人が親しかったことは知られているが、本資料でも写真 58 の石原の写真や写真 56 の集合写真、東亜連盟の行事での一コマと思われる写真 57 があり、二人の交流を確認することができる。

6. 南京時代

朝日新聞退社後、中山は郷里での療養を経て上京し、外務省嘱託として中国問題の専門家として活動するようになり、近衛文麿（1891 ～ 1945）に仕え、さらには満洲国の建国大学教授となるなど活躍した。

次に「南京にて」（写真 59 ～ 66）とキャプションがつけられたものなど満洲国の駐中華民国特命全権公使時代と推測されるものをあげる。

写真 59 「南京にて」

写真 60 「南京にて」

写真 61 「南京にて」

写真 62 「南京にて」

写真 63 「南京にて」

写真 64 「南京にて」

写真 65 「南京にて」 前列左から 2 人目が中山

写真 66 「南京にて」 奥中央が中山

上記の南京での写真とされるものと並んで次の写真 68 がある。

これとは別の写真 67 と 69 は背景から同じ建物の前で撮影されたものだとわかるが、写真 68 の背景ともよく似ている。

南京でのものと思われる写真 68 には「望郷廬」という文字がみえるが、中山は東京郊外の狛江の自宅について「現に私の小さな家には『望郷廬』という宮島大八先生の一軸がかかっている。これは昭和九年、故郷の老母が病中にこの書斎を新築したとき、日々気になるので名づけたものである」[20] と述べており、居所にこの名称をつけていたようである。写真 67、69 の建物は後掲する狛江の自宅と思われるものと異なっていることから、別の場所のものであろう。もし写真 68 と写真 67、69 が同一場所での撮影だったすれば南京での邸宅も「望郷廬」としていたのかもしれない。

写真 67 左端の中国服が中山

写真 68　左の中国服が中山　背景の煉瓦造りの建物に「望郷廬」とみえる

写真 69　左端の中国服が中山

写真 70「南京大使館の玄関」というキャプションがついている

7. 戦後

写真 71 「日本クリーナー会社発足ノ日 二十六年七月一日」

写真 71 の「日本クリーナー会社」とは現在の日本クリーナー販売会社のことだと思われるが、中山との関係は詳らかではない。顧問などをしていたのかもしれない。

写真 72 「昭和二十六年七月　根本氏大臣就任祝いに登張氏の上京を祝ふ　建大一、二期生の集い」というキャプションがついている

写真 72 には中山自身は写っておらず、建国大学関係者から送られたものであろう。彼は 1943 年（昭和 18）に建国大学教授を辞職しているが、この写真は戦後も同大関係者と交流が続いていたことをしめすものである。

キャプションの「根本」は政治家の根本龍太郎（1907 ～ 1990）で、写真は第 3 次吉田第 2 次改造内閣で農林大臣に就いた際のものであろう。「登張」はドイツ文学者の登張竹風（1873 ～ 1955）で、根本とともに建国大学の教員として中山の同僚であった。

写真 73　東亜連盟学院講習会　最前列中央が中山

（写真 73 の部分拡大）

写真 74-1 「昭和二十八年一月六日　東亜連盟同志会第一回中堅会員講習会記念　於石川県鶴来町　石川県立白山公民館」

写真 74-2

写真 73、74 は東亜連盟関係の行事のものであるが、石原莞爾が組織した団体自体は 1946 年（昭和 21）に解散している。しかし、上記写真のように 1953 年（昭和 28）時点でも同名称による活動が継続されていたようである。

写真 75 「外交部同人会発会記念　昭和 28 年 6 月 20 日」 前列右から 5 人目が中山

写真 75 には「外交部」とある。中山の経歴から考えるならば満洲国外交部のことであろう。

写真 76　内田良平「十六年祭記念　昭和二十八年七月二十五日」というキャプションがついている

内田良平（1974 ～ 1937）は黒龍会を主催した著名な国家主義者である。中山との直接の接点はみいだしえていないが、このような肖像写真をアルバムに収めていることから直接的な交流があったのかもしれない。

写真 77 「三十一年三月　銀座集席にて十五期生　同期生」というキャプションがついている　前列左から 4 人目が中山

前掲『東亜同文書院大学史』は、中山が 16 期生の調査旅行に参加したことから、彼を 16 期生扱いしているが、ここではともに入学した 15 期生を「同期生」としている。

写真 78　水野梅暁の肖像画の切り抜き

本資料に水野梅暁（1877 ～ 1949）の写真はないが上記の肖像画の切り抜きが収められている。

水野梅暁は、東亜同文書院で門番などの雑務をしつつ聴講した後に長沙で仏堂を開き、後に『支那時報』を主宰するなどジャーナリストとして活動、満洲国では満日文化協会設立に尽力するなどした[21]。日中両国に幅広い人脈を構築し活動していたこともあってか東亜同文書院関係者からも一目置かれていたようである。彼は東亜同文書院の正式な学生ではないにもかかわらず前掲『東亜同文書院大学史』などでも同窓扱いされているが、これは彼が関係者にとってのカリスマである院長根津一の内弟子的立場にあり、一般学生より根津との強い繋がりが想起されたためなのかもしれない。しかし、毀誉褒貶定まらない人物だったようで、彼が画策した東亜同文書院の北京移転が卒業生たちの猛烈な反対に遭い頓挫するなど[22]、関係者間で人望が厚かったというわけはなかった。

写真 79 「水野梅暁先生の墓前にて　三十二年九月」というキャプションがついている　墓石の形状から埼玉県飯能市の鳥居観音での撮影であろう

中山とのかかわりについていえば、1957 年（昭和 32）撮影の写真 79 のキャプションにあるように「先生」と呼んで墓参りま

でしており良好な関係にあったたことが推測される。

写真 80 「松田江畔」というキャプションがついている　左が中山　右が松田

松田江畔は水野についてまとめた『水野梅暁追懐録』（私家版、1974 年）を出しており、中山とはその関係で面識があったのであろう。

写真 81 「胡先生」というキャプションがついている　胡蘭成であろう

写真 82　手前は中山、奥の中国服が胡蘭成

写真 82 の背景の家屋が和式であることや、くつろぐ中山の様子から、これは狛江の中山の自宅での撮影と思われる。

胡蘭成（1906 ～ 1981）は著名な作家であると同時に汪兆銘政権の幹部だった経歴をもつ人物である。張愛玲と結婚していたことでも知られる。中山とは戦前から面識があり[23]、戦後、胡が日本に亡命してからも交流があったようで前掲『中山優選集』にもたびたび登場する。

写真 83　中国服姿が胡蘭成、中央の和装が中山

写真 84　先頭が中山、右後方が胡蘭成

写真 84 の田畑を中山、胡一行が闊歩している様子は小山寛二が中山について「先生は堂々たる『狛江の守』であったし、領内御巡検がときどきおこなわれた。着流しで、杖をついて、先生は飄々と、竹藪をくぐったり、林間の小径を横切ったりして、村の家から家へと歩をはこびまわってゆく」[24]と述べている情景と重なっており、狛江の中山邸附近での一コマなのかもしれない。

写真 85　胡蘭成

写真 87　右端が中山

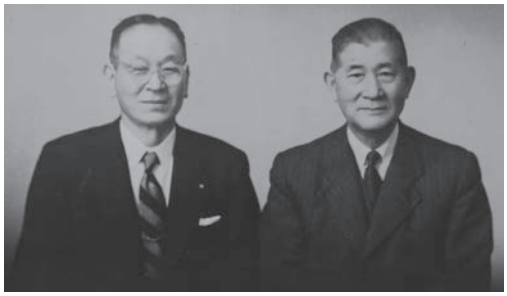

写真 86 「野村海軍大将（直邦） 兼井鴻臣（ツマラヌ男） 昭和二十九年六月」というキャプションがついている　右が野村、左の眼鏡をかけているのが兼井

写真 65 には兼井について中山は嫌悪感もあらわに「ツマラヌ男」と記している。兼井には、『赤裸の日華人』（人文閣、1942 年）、『中国人を語る』（芙峰叢書第 11 輯、東亜出版部、1940 年）、『霊峰に捧ぐ』（黒竜江民報社、1937 年）、『満洲に在り』（芙峰叢書第 7 巻、発行元、発行年不明）といった著作があり、中国関係のジャーナリスト、評論家だったようである。

徳富蘇峰（1863 ～ 1957）宛ての朝日新聞北京特派員時代の中山からの書簡、戦後にも胡蘭成との連名での書簡があることから交流があったようであり、徳富を記念する行事にも参画したと思われる[25]。

8. その他

撮影時期を推測することが難しい写真などを紹介する。

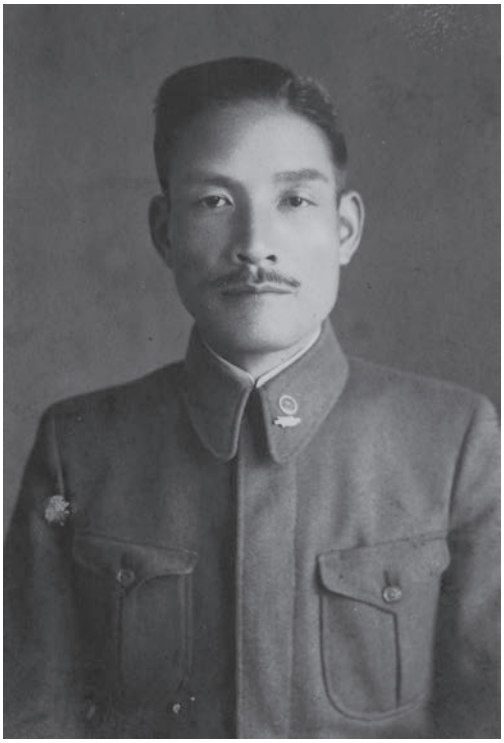

写真 88

写真 90

写真 89

写真 91

写真 92　右が中山

写真 93　前から２列目、右から３人目が中山

（写真 93 の部分拡大）

写真 94　２列目中央が中山

（写真 94 の部分拡大）

写真 95　森茂のポートレート切り抜き

森茂（1876 ～ 1928）は、中山在学時の東亜同文書院の教頭である。早稲田出身、東

亜同文書院創立時の教授兼舎監、後に満鉄に入り川島浪速の満蒙独立の企てに参画、失敗後は再び東亜同文書院に戻り 1917 年(大正 6)から 1919 年(大正 8)まで教頭を務めた。著作に漢詩集『滄浪集』がある[26]。

写真 96　アルバムに収められていたポートレート（詳細不明）

文中、引用に際して日本語資料は旧字体を新字体に改めた。

本稿は、平成 26 年度科研費基盤（C）（課題番号：26370747）の助成をうけた研究成果の一部である。

注

(1) 大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』滬友会、1982 年、388 頁。

(2) 中山優『再認識下の支那』平凡社、1933 年。同『故郷の甥に与ふ』賓陽書院、1936 年。同『支那論と随筆』刀江書院、1940 年。同『対支政策の本流』育生社、1937 年。同『東亜連盟への途』大民社出版部、1940 年。同『東亜連盟問答』東亜連盟協会、1940 年。同『中国の素描』明徳出版社、1957 年。

(3) 中山優『中山優選集』中山優選集刊行委員会、1972 年。

(4) 栗田尚弥『上海東亜同文書院』新人物往来社、1993 年。

(5) 中山優を簡潔に紹介するものとして彼の出身地の教育委員会による『中山優 ： 生涯を中国問題の解決に捧げた哲人（一八九五－一九七三）』（山鹿市教育委員会教育部文化課、2013 年）を紹介する。

(6) 中山優「水呑み百姓の本家意識」、前掲『中山優選集』。

(7) 中山優「根津山洲先生と落第生」、前掲『中山優選集』、263 頁。

(8) 同 264 頁。

(9) 同 264 頁。

(10) 『虎風龍雲』東亜同文書院、1918 年、99 頁。

(11) 同 108 頁。

(12) 中山たちの調査旅行については、16 期生の卒業文集にあたる前掲『虎風龍雲』、卒業論文集にあたる『東亜同文書院中国調査旅行報告書』第 13 回（41 ～ 46 リール、雄松堂、1996 年）に詳しい。

(13) 中山優「中共革命と伝統」前掲『中山優選集』、154 頁。

(14) 前掲『虎風龍雲』99 ～ 117 頁。

(15) これと同じ写真が前掲『虎風龍雲』にも「湖南へ湖南へ」と題されて収録されている。

(16) 前掲『虎風龍雲』にも同じ写真が収録されている。

(17) 前掲『虎風龍雲』、109 頁。

(18) 前掲「根津山洲先生と落第生」、264 頁。

(19) 前掲『中山優選集』奥付の「中山優略歴」では朝日入社を 1918 年（大正 7）と

し 1922 年（大正 11）より病気療養とするが、1918 年彼はまだ東亜同文書院の学生であり、中山優「水呑み百姓の本家意識」（同書、369 頁）では 1923 年（大正 12）関東大震災の後に郷里に戻ったと述べていることから、朝日退社は 1923 年中のことであろう。

(20) 前掲「水呑み百姓の本家意識」、368 頁。

(21) 水野梅暁と満日文化協会とのかかわりについては石田卓生「『芸文志』と満日文化協会」（『中国東北文化研究の広場』第 1 号、満洲国文学研究会、2007 年）で触れている。

(22) 石田卓生「東亜同文書院の北京移転構想について」『中国研究月報』第 63 巻 2 号、2009 年。

(23) 竹之内安巳「南京回想記」前掲『中山選集』、417 頁。

(24) 小山寛二「望郷廬先生行状記（抄）」前掲『中山優選集』、423 頁。

(25) 財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団編『財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵徳富蘇峰宛書簡目録』、1995 年。

(26) 森茂著、宮島大八編纂『滄浪集』井坂秀雄発行、1935 年。